

## 新石器時代の穿顱術について(三)

岡田 太郎

癒着の跡は見當らず、頭蓋骨の病性より考へるに、手術は長期間に亘つた病理方面の治療を行ふ自由で行はれたものと考へられる。前骨の右方表面の角状隆起は穿顱術を行はうとして豫備的に行つた手術の結果陥落した爲めであると思はれる。多分何等か手術原因となつた異常があつたものであらう。手術用器を想像せしめるに足る痕跡に認められない。唯、穿孔邊が鋭く削除されてゐることが認められるのみである。骨質はその病的事情の爲めに容易に削除し得たらしい。此の頭蓋骨には何等畸形的なもの認められないのは興味あることである。これは患者の病理的事情が古く發病したもので患者に特別な注意が拂はれた結果であらう。手術部分は極めて危険な部分であつて手術が未熟であつたか、又は何等か特に必要な事情があつて此の部分が選擇されたものであらう。

第二回の頭蓋骨はスウリヴァンかニユウ・メキシコのラミイで發見したもので種々な點で興味あるものである。頭蓋は此の地方から發掘された頭蓋とは全然別個なものである。その自然的長頭形は人工的に變形された短頭とは著るしい對照をしてゐるもので、後者はサンクリストバルの遺蹟から現はれる特徴である。頭蓋は遺物堆積層の底部から發見されたもので、此の堆積層からは多くの頭蓋が發見され、此の典型部落の古住民があつたことを示してゐるものでなくてはならない。要するに此の頭蓋の一般的性質はサン・クリストバルの他の頭蓋と著るしく相違するものであつて、穿顱は右方顱頂部に行はれ、矢狀縫合の中央から約一釐右方にある。穿孔はダイヤモンド型をなして居り、長軸の後方に向つて約二〇ミリである。穿孔の正しい點と孔邊の斜截された痕跡とは穿顱術の性質を明白に示してゐるものである。孔邊には癒着の跡があり、削除部分には完全な骨増殖があり、檢鏡の結果中央部分に新生骨が針狀に生じてゐることが認められた。此の穿顱位置は原始穿顱術が最も頻繁に撰んだ箇所である。病理的事情は少しも認められない。要するに此の穿顱頭蓋は手術後癒した先史時代穿顱術の南西地方に於ける代表例である。

此の種の外科手術が先史時代に行はれたことについては種々な假説が試みられた。プロカは癲癇患者に對する治療として行はれたもので、惡靈が頭蓋骨の穿孔から逃げるものと信じられてゐたと言つてゐる。多くの場合前頭骨に手術が行はれないで顱頂部に行はれる故に此の迷信が主要原因であつたと力説してゐる。ミュニツワ及びマツク・ヂイは穿顱術が呪術的起源を有するもので本來治療的なものではないとまで極言してゐる。當初は呪術的護符を得る爲めに死人に行はれたものであつたが後には同一目的よりして捕虜に行はれたものでその治療力が穿顱術の

附加理由として認められるに至つたのは、先史時代も餘程後であるらしい。

現代では穿顱術は北アフリカのカビール人間に行はれてゐると言はれてゐる。カビール人は此の手術が極めて巧妙であり、外傷、頭痛、眩暈等の場合に行ふ由である。クラブはニュー・ブリテンの穿顱術は主として外傷の結果行はれるものであることを發見した。ニュー・アイルランドでは癲癇及び或る種の發狂に對する治療法として手術が行はれることが報告されてゐる。ラツフネルによればダグスタンの丘地部族、クヒチ人、モンテネグロ人間でも現在穿顱術が行はれてゐると言つてゐる。

更に上述二個の先史時代人骨の例によつて北米南西地方にも穿顱術が行はれてゐることが知られ、同手術の分布に關し重要な追加を行つたわけである。

【附記】

本稿は

Shapiro, H. I., Primitive Surgery, First evidence of Trephining in the Southwest, Journal of the

American Museum of Natural History, vol XXVII No. 3. pp. 266—9 に據る。